

総合的な評価ワークショップ（第 25 回水源環境保全・再生かながわ県民フォーラム）  
に係る検討調整会議（第 1 回・第 2 回）結果概要

## 【第 1 回】

日時 平成 27 年 4 月 24 日（金）18:00～20:00  
場所 かながわ県民センター 12 階 第 1 会議室  
出席者 施策調査専門委員会  
伊集委員 鈴木委員 田中委員 吉村委員  
県民フォーラムチーム  
北村委員 倉橋委員 坂井委員 中門委員 西委員 前田委員 森本委員  
オブザーバー 滝澤委員  
県 村松水・緑部長 水源環境保全課 内山副課長 葉山グループリーダー 高乗副主幹 楚良主事

## 概 要

資料 1～3 に基づき、総合的な評価プレワークショップ（第 24 回県民フォーラム）の開催結果及び 7 月の総合的な評価ワークショップ（第 25 回県民フォーラム）開催案等について事務局より説明した。プレワークショップの反省を踏まえ、ワークショップの開催内容に関して意見交換した。主な意見は以下のとおり。

（○＝委員、●＝事務局）

## 議題 1

## 総合的な評価プレワークショップ（第 24 回県民フォーラム）の開催結果についての感想・反省

## 会場の配置等について

- 車椅子用の席を予め設置しておいた方が良かった。
- マイクの位置がステージを見上げる形になってしまったのが残念。皆が討論している雰囲気になるようにマイクを配置できると良かった。

## 事前準備について

- 2 階が全て埋まっていなかったため、受付期間を延ばして、200 名まで呼び込む努力が必要だった。また、当日の参加者数は事務局も入ったものではなく、純粋な県民の数で知りたい。地域・年齢も資料に載せてほしい。
- 募集締切後も受付はしており、ホームページ等で周知した。地域・年齢が入ったアンケート結果を次の県民会議で資料にする。

## 内容について

- 予備知識が無い人にとっては、背景をきちんと説明した上で今の取組を紹介しないとわからないと思う。
- 20 代と 30 代が 1 割程度来たことが評価できる。地下水関係のパネリストがいると良い。質問用紙は事前に配布資料にいれておけると良い。
- パネリストの主張が強すぎると印象に残ってしまうので、課題点を紹介するにとどめるなど、パネリストの役割を整理すべき。
- パネルディスカッションが一番良かったとのアンケート結果が出ている。一方、もっとパネリスト同士でやりとりをしてほしかったとの意見もある。強い主張があっても、それに対立する意見があり、議論できれば、コーディネーターが何が論点になっているのかまとめていければ良いと思う。パネリスト同士の議論を考えるのであれば、そのことを想定した人選をすると良い。
- パネルディスカッションのテーマ決めに関して、いろいろな立場に共通なテーマは包括的なテーマにせざるを得ない。具体的なテーマにすると様々な論点が出てくるが、関わる人が絞られてくる。テーマ選定も

難しいところ。

→今回はフォーラム自体が「みんなで～」というタイトルだったので、パネルディスカッションのテーマも包括的になった。タイトルのネーミングでどのような開催内容にするのか、どういう議論にするのか、絞り込めると思う。次のタイトルを「みんなで～」にするのか、「第3期をどうするか」、「第2期までの評価・検証」にするか。

○現場の人にもっと意見を言ってもらいたい。

●今回はある程度知っている方に課題を言ってもらいたいという目的があった。今回のアンケート結果の税を知っている人が8割以上というのはまさにその結果だと思う。次のフォーラムでは一般の人がどう思っているのか、が課題となる。一般の人もいれて課題を言ってもらう場合、専門的な内容が多いので、わかってもらえるか、気になるところではある。

●説明時間が非常に短い中で、中身は広く、専門的なものが多い。説明内容の焦点を絞れると良い。

## 実施後

○神奈川新聞に掲載された記事（横浜版）を事務局から送ってもらったが、湘南地域版には記事が載ってなかった。全域に載っていた方が良い。

→県央地域版には載っていた。地域によって見出しが違うようだった。

○認知度について、「知らない」と答えている人が他の項目にどのような答えをつけているか分析してみてもいいかもしれない。

## 議題2

### 総合的な評価ワークショップ（第25回県民フォーラム）の開催内容について

#### 会場について

○県西の方から横浜へ来るのはなかなか難しい人もいる。いろいろな人に参加してもらうためには、今回は場所を横浜から変えてもよかったと思う。

●7月より後の県民フォーラムで県央や県西などいろいろな場所を検討していければと思っている。

○会場はできるだけ午前と午後同じ場所のほうが良い。

○タイムスケジュールが参加しづらいのではないかと。お昼の時間が遅いと思う。開始時間をはやめられないか。

●30分程度早められないか、検討する。

#### 開催内容について（全体）

○プレワークショップは取組み状況や現状認識を皆で共有してもらおうということであった。今回はもう一歩ふみこんで、今後に向けて、課題をどうまとめていくか、という話をしないと、次期の話につながっていかないと思う。分科会の位置づけをもう少し明確にして、全体会として第3期につながっていく話のまとめにしないといけないと思う。

○一般の方は午前、知っている人は午後の分科会へ、という分け方にしてもいいかも。

→午前中は一般の人も含めて広く関心をもってもらうような、発信の場にする。午後は実際に活動している人などから評価、提案を出してもらい、次期計画へつなげていけるようにする。

○午前は実績・成果のプレゼンまでやり、それを一般の人に聞いてもらった方がいいのでは。基調講演25分、実績・成果25分にしてはどうか。50分基調講演だと専門的な話になってくるが、25分の方が割り切った話が出る。25分なら知事にも聞いてもらえるかもしれない。もっと踏み込んだ中身の話は午後してもらおう。

○一般の方を意識するならば、知名度がある人と知事との対談でも良い。

○知事がコーディネーター役で対談してもらおうと良いのでは。

## 分科会について

- 分科会のテーマについて。「森」「水」などのテーマに分ける案もあるが、共通テーマをグループ毎に討論にすることも考えている。
- 全体の意見集約が30分では難しいと思う。何人くるか、ある程度知っている人がどのくらいくるかで変わってくる。知っている人60~70人くらいで3グループくらいの規模なら分科会もできると思うが、200名集めるのであれば、パネルディスカッションで次期計画の話をした方が良いかもしれない。
- 県民会議から次期計画へ向けて意見書を出すにあたって、まずたたき台を作って、ワークショップの午後で示して意見をもらうというやり方にした方が良いかもしれない。
- 分科会のテーマは事前に案内しておいた方が意見が出やすいと思う。
- 分科会は共通のテーマで実施し、その中で主にこれを論点にする、という特徴付けをした方が、全体討議の際に深まるかもしれない。

## その他

- 議員に施策を知ってもらうため、今回のワークショップに参加してもらうことを検討すべき。参加しないのであれば何故呼ばないのかも話しておく必要がある。
- 次回の検討会議をスムーズにするためには、事前に意見を集約しておいた方がいい。論点リストをつくっておく。  
→今回の議事概要を事務局から各委員に送り、各委員からの検討論点があればそれも共有してもらいたい。

### 【第2回】

日時 平成27年5月20日(水) 10:30~12:00

場所 TKP横浜ビジネスセンター ミーティングルーム7A

出席者 施策調査専門委員会

浅枝委員 鈴木委員 田中委員

県民フォーラムチーム

北村委員 倉橋委員 坂井委員 中門委員 前田委員 森本委員

県 村松水・緑部長 水源環境保全課 葉山グループリーダー 龍副主幹 高乗副主幹 楚良主事

## 概要

資料1-1~2に基づき、総合的な評価ワークショップ(第25回県民フォーラム)の開催案等について事務局より説明の上、全体構成や内容、募集チラシ原稿などに関して意見交換した。主な意見は以下のとおり。  
(○=委員、●=事務局)

## 議題1

水源環境保全・再生施策の総合的な評価ワークショップ(第25回水源環境保全・再生かながわ県民フォーラム)について

### 全体及び第1部(午前)について

- 基調講演のタイトルがあった方が良い。また、講演内容は水源施策に関わる話なのか、それとももっと幅広い話なのか。
- おそらく幅広い話になるのではないかと想定される。
- 第1部に関しては、水源環境保全・再生についての期待をいろいろな人に語ってもらう、応援演説をしてもらえると良い。施策の検証は第2部でやる。

- 第1部の県説明では、第2部の討議のテーマにつながるような流れで説明してもらいたい。これまでの取組実績の中で、どこに問題や課題があるのかを示し、その点を第2部で討議していただくなど、一つの流れ、ストーリーを作らないと上手くまとまらない。
- 県が説明すると、今までやってきたことを肯定的に評価する方向になるが、そうすると参加者としては今さら何を議論するのかとなる。第1部で、これで良いのかとか、考えた方が良いのではないかとといった意見が元気良く出てくると、それならば午後の第2部で考えてみようという気になるのではないかと。
- 基調講演では、水源税後半に向けての期待や示唆的なことを述べてもらうことで、第3期のことも見えてくると良い、この取組の未来像を語ってもらえると嬉しい。
- 基調講演では、森林・林業を取り巻く環境変化や他県の状況なども含め、大きな視点で今後の10年に関して話してもらうことが重要。また、これまでの取組を説明してもらう意味で県の説明も必要。一方、午後の分科会では、現場の方の地に足の着いた話を聞く必要がある。
- タイムスケジュールは、第1部を12時で終わるようにし、第2部を13時開始とした方が良い。

## 第2部（午後）について

- 分科会のグループ分けについて、前回フォーラムのアンケート結果を参考に、県民の関心の高いテーマで分けてはどうか。
- 分科会の討議時間が120分あるので、最初に1～2人がプレゼンをやって問題提起してから討論に入るなど、皆か意見を言いたくなるような仕掛け、時間を持て余さないような工夫がいる。
- 分科会に入る前に、県民会議委員OBの方に第1期、第2期を振り返り、第3期に向けた建設的な提案をしてもらうと方向性が出て良い。
- 分科会の回し方として、県民会議委員はファシリテーター役となり、上手く討議が回るようにすべき。
- 最終的には取りまとめて発表する必要があるが、フリートーキングではまとまらないリスクがあり、事前の段取りやシナリオを用意することが大事。リーダーの配置や3つ位にテーマの絞り込みをし、同じテーマで次期に向けての議論をしてもらう。
- 分科会には初めて参加する方もいる中で、しっかりした結論を出すのは難しく、基本的には応援会になれば良い。この取組は重要だと皆に言ってもらえれば十分。
- これまでのフォーラムで、問題であるとして参加者から出された意見に私達は応えていないのではないかと。今回、参加者に対しては、8年間抱えてきた問題意識をお寄せいただきたいとの姿勢で臨むべき。
- 分科会のグループ分けは、テーマ別ではなく、共通のテーマをA～Cの少人数グループとするのが良い。
- 分科会には、現状を知る方が入らないと話が繋がらない。現場にいる方を呼ぶべき。例えば、林業関係の川又氏、ワイルドライフ・レンジャー、内水面関係、川の自然再生に関わっている方など。
- 水道事業者の方にも、現状報告や問題提起をしてもらうと良い。
- 一般参加のシンポジウムやワークショップをやる際には、特別対策事業との直接的な関わりに限定せず、広い範囲で問題を議論してもらう局面も必要。
- 全体会で森、水、生態系の話それぞれしてもらった上で、分科会に入ってもらい。分科会を90分に縮小するなど、そのための時間を設ける。
- 分科会は90分間をテーマで30分ずつに区分し、3人が3グループを順に回って話をする方法もある。
- 1テーマ30分の方法は、緊張感が保てる面でメリットがある。しかし、議論が白熱した場合に30分で納まるかどうかのリスクもある。
- 討議の趣旨説明を第1部に移行し、第2部の冒頭で現場を知る方などから話してもらう時間を設けてはどうか。
- 最後の全体会で意見集約することになるので、分科会の記録係が必要。
- 分科会の議論や評価アピールの内容は、これまでまとめてきた評価報告書、意見書の内容を念頭に置くことになるのではないかと。

## 募集チラシについて

- 第2部の内容説明の表現が固過ぎるので見直した方が良い。
- 細かなタイムスケジュールは記載不要。第2部についての記載は、①～④の番号を外してこういうことをやる程度の示し方とする。
- 基調講演講師の写真を載せるべき。
- タイトル下の説明文について、20年間の全体計画であることの話がないと10年の節目だと分からないので表記を工夫すべき。
- タイトルは「水源環境保全税によるこれまで これから」の方が良い。

## 実施後、広報

- 開催後のフォローも必要で、お金をかけずに大手メディアに取り上げてもらうような手法を工夫しないといけない。
- 水循環基本計画が7月頃に閣議決定される予定であり、そうした動きと上手く絡めるなど、マスコミへの働き掛け方を工夫すべき。

## 議題2

### 水源環境保全・再生かながわ県民会議 勉強会について

- 6月の勉強会も横浜シンポジアとのことだが、議場で行うのか。
- 吉田教授の講義は議場で、7月の設営面のリハーサルも兼ねてグループ別会議は会議室等で行う予定。

## 第2回まとめ

### 第1部

- ・基調講演のタイトルを確認する。
- ・第1部の取組実績・効果検証の県説明を25～30分程度に圧縮し、第2部につなげるような討議の趣旨・論点説明を10～15分で行う。

### 第2部

- ・全体会で森林管理、林業、生態系、水、水道事業者、税など、この施策を取り巻く様々な関係者に、施策の受益や効果をどう考えるかについて多様な側面から10分ずつ話していただく。その際に経済評価についても専門家又は事務局から話をする。分科会ではそれらを素材にし、この制度はどうかの議論に入ってもらおう。
- ・分科会のグループは、テーマ別に分けるのではなく、共通のテーマを少人数化して議論するために分ける。
- ・分科会は現場の実態を反映した議論をしたい。そのためには、林業関係者やワイルドライフ・レンジャー、水道事業者など現場の方を呼ぶ。
- ・分科会では論点を2～3に絞り、そのことについて議論していただく。シナリオを作り、議論を集約していく。そのためには、委員がファシリテーターとして参画する。一方、必ずしも明確な結論が出るわけではないことも想定した方がよい。
- ・分科会のシナリオ作りや論点の設定については、もう一段先に進んだところで整理する。